

「建築職人アーカイブ」発刊記念シンポジウム 「職人技術のゆくえ」 記録1

基調講演「つなぐ職人技」 近江美郎

職人アーカイブ委員会

3月16日サンシップ福祉ホールで開催



■挨拶

中野会長が「建築に関わる職人の状況が大きく変化して、建築生産の形が変わっていきこうとしている。私達の足もとを見直し、建築を造ることの意味を考えたい。」と挨拶。

■事業報告

続いて、林芳宏副会長から平成23年からスタートした、職人アーカイブ事業の経過と書籍発刊にいたる経緯について報告があった。

最後に、「徒弟制度によって守られてきた側面を持つ職人の技術は戦後の急激な機械化、生産性の向上や経済性優先の価値観のなかにあっても柔軟に対応して進化してきた。しかしながら、更なる技術革新や社会構造の変化へ対応しきれない職種も現れ、文化財の修復といったような特殊な場合でしか職人技術を活かす仕事はなくなるのか？」との感想も話された。

■基調講演：「つなぐ職人技」講師 近江美郎氏

自らの37年間の設計の仕事で経験した建築生産の歴史について、バブルの時代から最近の低成長でマイナス金利の時代までの変化の大きさを概観し、全ての状況を経験した中で、現代のキーワードは少子高齢社会と自然環境の問題と指摘。

職人さんが少なくなるなか、東北大震災の復興事業特需で職人さんが東北に取られ他の地域では少なくなった。さらにオリンピックの誘致が決まり東京に大きな需要が出ており、全国的に予算があっても消化出来ない事態となり、結局機械化や外国人労働者でこなすことにならざるをえない状況で、伝統技術が継承出来なくなっているという。

また、独立した当時、木材は火にも構造的にも弱く、耐久性もコンクリートや鉄骨より劣ると言われた時代だった。

しかしそれは本当だろうかというところから木造の見直しの機運が出てきており、法隆寺の千年以上の耐久性や東大寺大仏殿などの巨大建築物の構造強度を鑑みて、もっと再評価されるべきと考える。

富山でも身近に国宝瑞龍寺、重文勝興寺、瑞泉寺などの誇

るべき仏閣建築があり、これを見ると富山の木造建築が全国的にも高水準であり、その技術を継承した世界遺産の合掌造りや日本一美しい民家と言われるアズマダチ、竹内源造の鍔絵等伝統工法の技能が継承されてきており、この技術水準を生かすべきである。八尾の諏訪町の景観も、八尾の大工さんが八匠というグループを作り熱心に八尾型の町家を作る努力をして、今の姿になった。

しかし、単純に伝統技術を継承して使うだけでなく、その技術を現代のライフスタイルに合わせる工夫と智恵がないと難しい。そのことを氏の作品を例に、伝統技能の生かし方として、古民家の再生、枠の内の活用、職人さんとのコラボの三つの手法の紹介があった。

■古民家再生

築100年の自邸を再生した例では、家族を説得するのに3年かかったとのことで、古い住宅を再活用するハードルは高いようである。

それでも、暗かった中の中の屋根を取り中庭にして、回りの部屋全てに外光を入れて明るくするとともに、小屋組が見える改修で匠の技が見えるようにした例をはじめ、枠の内を祭りの練習ができる用途にした住宅や、築130年の住宅をステーキハウスにコンバージョンした例の紹介があった。

■枠の内の移設利用

天井が高く、豪壮な梁組が見える枠の内を活用した新築住宅や、外観が和風でなくても、レストランの客席として使用した例は評判が良いようで、この他、古材を活用したニチマクラブの客室の例も紹介があった。

■職人とのコラボレーション

今までも作家とのコラボは多くしてきているとのことで、近作の高瀬神社の新参集殿での、彫刻家による石と滝、ステンドグラス作家によるガラス戸、扉の引き手に鋳物作家など多数の職人とのコラボレーションの紹介があり、このようなことが職人さんの行方を考える際の参考にしてほしいと結ばれた。



水曜日にも拘わらず、多くの方の参加がありました。

※ 「建築職人アーカイブ」は4月上旬から市販しています。是非 県内の主要書店でござらん下さい。